

親の被養育経験が現存の養育態度にもたらす影響

— 養育受容と育児サポートに注目して —

森村 瑞枝* 相良 順子

Effects of Parents' Experience of Growing-up on Current Child-Rearing Attitudes

: Focusing on Accepting Child-rearing and Childcare Support

MORIMURA, Mizue and SAGARA, Junko

要旨

本研究は、育児前と育児後で、被養育経験の捉え方がどのように変化するか、自身の養育態度にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とし、未就学児の育児を行っている父親・母親594名を対象に質問紙調査及び面接により検討した。研究Ⅰの質問紙調査では、自身の親から受けた被養育経験をどう認識しているか明らかにするため、親の養育受容に着目した。その結果、親の養育を「受容平均群」「高受容維持群」「受容低群」の3群に分類することができた。研究Ⅱの面接調査では、被養育経験の捉え方の変化が自身の養育態度にどのように影響するか検討した。その結果、被養育経験が否定的であっても、親の養育受容が肯定的になる可能性が示唆された。

キーワード

被養育経験, 養育受容, 育児サポート, 養育態度の世代間伝達

Abstract

Changes in perspectives of a person's own experiences of growing up before and after raising children and how the person's own experiences of growing up affected his or her child-rearing attitudes were investigated. An interview and questionnaire surveys were conducted with fathers and mothers (N=594) raising pre-school children. Study 1 investigated how participants perceived their own experience of being raised using a questionnaire focusing on accepting their parents' child-rearing practices. Results indicated three types of acceptance: "average," "high," and "low." Study 2 examined how changes in perspectives about own experience of growing up affected a person's child-rearing attitudes through interviews. Results showed that even parents that had negative experiences when growing up accepted their parents' child-rearing practices positively.

Key words

Parents' experience, Accepting child-rearing, Childcare Support, Intergenerational transmission of child-rearing attitudes

問題と目的

近年、核家族化、少子化、住宅事情などにより育児の孤立化が多くの問題を生じさせている。この孤立化にあわせて、世代間伝達の問題がますます注目されている。養育態度の世代間伝達について、遠藤(1992)は、抱っこなどの無意識の身体的記憶を子が母となった時の養育の基礎とし、世代間伝達をすると論じている。しかし、氏家(2013)は、親子関係は非常に多様で、親子を2つではなく、複数の世代間の関係と捉える必要があるとしている。さらに、van IJzendoorn(1997)は、養育態度には、養育者の特性以外に、

育児サポートの程度など、様々な要因が関連するとしている(数井, 2018)。本研究では、親の被養育経験が自身の養育態度にもたらす影響について検討を行う。

世代間伝達の研究において、アタッチメントはよく研究されているが、養育態度の世代間伝達については、あまり実証されていない。養育態度の世代間伝達の先行研究には、Rholes(1997)、林・横山(2010)、Fonagy(2001)、渡辺(2016)、木本・岡本(2007)らの研究が挙げられる。Rholes(1997)は、親子関係において肯定的な経験をした人は、子どもの保護を目的とした養育を連想しやすい。しかし、否定的な

* 聖徳大学大学院 児童学研究科 児童学専攻 博士前期課程修了 (聖徳大学・理科研究室・助手)

経験をした人は、過去に蓋をするなどの反応を引き起こす場合もあるとしている(数井, 2018)。林・横山(2010)は、ネガティブな養育の世代間伝達を起こしていない母親は、自らの経験を振り返る力に長けており、自身の経験や育児に対して内省する機会が多く、されて嫌だったこと、したくないことを明確に意識していると同時に、様々な育児サポートを積極的に享受していることを明らかにしている。Fonagy(2001)は、片親家族、親の犯罪行為、失業、家族成員数の過剰、精神病理などによる高ストレス群の母親でも、内省機能が高い母親の子どもは安定型になることを明らかにしている。さらに、渡辺(2016)は、再アタッチメント療法によって、母親の内省的自己を育みなおすことで母子関係を改善するとし、世代間伝達は決して決定的ではなく、親自身がつらい被養育経験を内省することが出来れば、子どもに葛藤を伝達しなくなることを明らかにしている。木本・岡本(2007)は、ネガティブな養育の世代間伝達を起こしていない母親は、夫などからの育児サポートを多く受けていることや、親の代わりになる重要な他者の存在があることを明らかにしている。

このように、肯定的な被養育経験は伝達するが、否定的な被養育経験が全て伝達するとは言い切れない。親自身が被養育経験を内省することが出来れば、否定的な被養育経験が肯定的な養育態度に変化すると考えられる。本研究では、育児前と育児後で、被養育経験の捉え方がどのように変化するかを明らかにするため、研究Ⅰの質問紙調査では、自身の親から受けた被養育経験をどう認識しているか、育児サポートがどのように関わっているか検討し、研究Ⅱの面接調査では、どのような経緯で被養育経験の捉え方に変化が生じたのか検討する。

研究Ⅰの調査では、中道(2013)の親の養育態度尺度を使用する。中道(2013)の親の養育態度尺度は、親の養育態度を「応答性」と「統制」の2次元から捉えることができ、幼稚園・保育園に通う両親を対象にしており、幼児期の子どもを持つ父親・母親どちらにも対応している。中道(2013)の研究では、応答性因子を“子どもの意図を出来る限り充足させようとする”とし、統制因子は“親が子どもにとって良いと思う行動を決定しそれを強制する行動”としている。しかし、浅野(2016)によると、統制的な養育態度は、子どもの反社会的行動を抑えるだけでなく向社会的行動を促すことが指摘されている。

本研究で使用する「被養育経験」とは、自身が親から受けた育児経験のことである。「自身の養育態度」とは、現在の子どものに行っている育児のことである。「親の養育受容」とは、自分が受けた親からの被養育経験をどう受容してい

るかである。育児を経験することで、自身の親の記憶を思い返し、当時親はどんな気持ちで自分を育てたのだろうと想像することで、自身の親をまた違った角度から捉えることが出来る。その結果、否定的な被養育経験を受容することが可能になると考えられる。

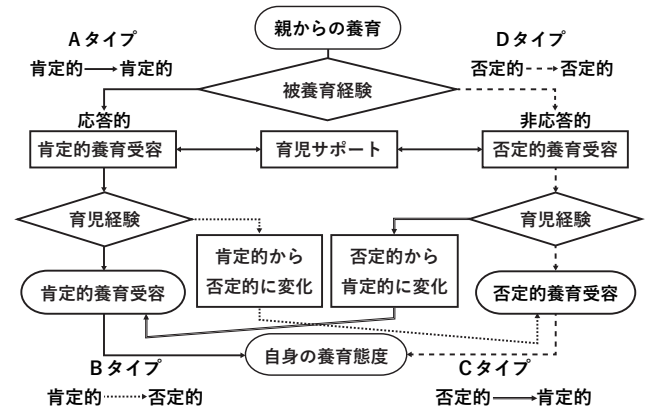


Figure 1 研究の仮説

本研究は、育児前と育児後で、被養育経験の捉え方がどのように変化するか、自身の養育態度にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とする。本研究の仮説として、自身の養育態度が変化するパターンには、Figure 1のA～Dの4つのタイプがあると予想する。Aタイプは、被養育経験が応答的で、親を安定したものとして内在化し、親の養育受容が肯定的なまま伝達される。Dタイプは、被養育経験が非応答的で、親を不安定なものとして内在化し、親の養育受容が否定的なまま伝達される。Bタイプは、育児サポートが得られない孤独な育児によって、親の養育受容が肯定的から否定的に変化する。Cタイプは、被養育経験が非応答的で、親を不安定なものとして内在化しているが、自身の子育てを経験することで、親の養育受容が否定的から肯定的に変化する。研究Ⅰ研究Ⅱにおいてこれらの仮説を検討する。

研究Ⅰ

【目的】

育児前と育児後で、自身の親から受けた被養育経験をどう認識しているか検討する。さらに、親の養育受容は、育児サポートの影響を受けるのか、自身の養育態度に影響を与えるのかを検討する。

【方法】

1. 調査対象と方法

対象：2歳～6歳の未就学児の育児を行っている父親・母親594名。

調査手続き：質問紙調査は、父親用と母親用で色を違え

て分け、父親用・母親用を1セットとして配布した。首都圏の私立幼稚園3園、公立幼稚園6園にて調査用紙の配布を依頼した。回収方法は、園での回収及び郵送回収とした。

調査時期：2020年10月下旬～11月中旬。

回収結果：配布1256通(628家庭分)、回収618(回収率49%)、内有効回答594(有効回答率96%)

倫理的配慮：文書にて、調査の目的、回答の任意性、個人情報非特定、調査目的のみにデータを用いることを説明し、調査の協力を依頼した。プライバシー保護の観点から、質問紙を入れた封筒を封緘して提出を求めた。なお、本研究は、聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理審査委員会の審査を受け認められた(承認番号R02U007)。

2. 調査内容

(1) 親の養育受容：育児を経験した前と後で親に対する気持ちがどう変化したかを調べるために、本研究で新たに「親の養育受容」を作成した。複数の親の養育についての尺度を参考にして検討した結果、「育児行動を理解する」、「育児行動を真似る」、「子どもを大切に思う」、「苦勞して子どもを育てる」等の4項目が重要だと考えた。育児前と育児後で違いを出すために、育児前は、「自分自身が子育てを経験する前～」として過去形で表現した。育児後は、「自分自身が子育てを経験した今～」として現在形で表現した。項目内容についてはTable 1 参照。項目は、「育児前の親の養育受容」と「育児後の親の養育受容」で構成され、全8項目、4件法(1：全くそう思わない～4：とてもそう思う)で回答を求めた。

(2) 被養育経験：中道(2013)の親の養育態度尺度の質問文を過去に受けた養育経験を尋ねる質問に書き直して、

「被養育経験尺度」として使用した。「応答性」「統制」の2因子で構成され、全13項目、4件法(1：全く当てはまらない～4：非常に当てはまる)で回答を求めた。

(3) 自身の養育態度：中道(2013)の「親の養育態度尺度」を使用した。「応答性」「統制」の2因子で構成され、全13項目、4件法(1：全く当てはまらない～4：非常に当てはまる)で回答を求めた。

(4) ソーシャル・サポート：荒牧・無藤(2008)の「ソーシャル・サポート尺度」を使用した。項目は、「道具的・情緒的サポート」(パートナーサポート・親族サポート・親族外サポート)と、「情報サポート」からなり、全12項目、4件法(1：全くそうではない～4：とてもそう)で回答を求めた。

(5) 回答者の属性：対象者の性別・年代・職業、本人を養育してくれた人・その年代、子どもの人数・年齢・性別。

3. 対象者の属性

研究協力者：594名。

年代の内訳：男性 20代～60代 224名。女性 20代～40代 370名。

就労状況：男性 常勤職86%、自営業10%。女性 常勤職14%、自営業6%、パート・非常勤29%、専業主婦49%。

主に養育してくれた人：母親 88.4%。

主に養育してくれた人の年代：60代38.9%、70代30%。

子どもの人数：1名129人(21.7%)、2名291人(49%)、3名139人(23.4%)、4名30人(5.1%)、5名3人(0.5%)、6名1人(0.2%)、8名1人(0.2%)。

Table1 親の養育受容の尺度項目

* 育児前の親の養育受容

- ・自分自身が子育てを経験する前、子どもの頃の親の育児行動を理解できなかった(逆転項目)。
- ・自分自身が子育てを経験する前、親の育児行動を真似したくないと思っていた(逆転項目)。
- ・自分自身が子育てを経験する前、親はあなたを大切にしてくれていると思っていた。
- ・自分自身が子育てを経験する前、親はあなたを苦勞して育ててくれていたと思っていた。

* 育児後の親の養育受容

- ・自分自身が子育てを経験した今、親の育児行動を理解できる。
- ・自分自身が子育てを経験した今、親の育児行動を参考にしたいと思う。
- ・自分自身が子育てを経験した今、親はあなたを大切に思ってくれていたと思う。
- ・自分自身が子育てを経験した今、親は親なりに苦勞してあなたを育ててくれたと思う。

【結果と考察】

研究における分析は、SPSS Statistics 27を使用した。

1. 各下位尺度の記述統計(平均, 標準偏差, α 係数)

各尺度の平均, 標準偏差, α 係数を求めた結果をTable 2に示した。被養育経験の統制, 自身の養育態度の統制, 道具的・情緒的サポートは十分な信頼性が得られなかったが, 先行研究で用いられている尺度であったため本研究でも使用した。

2. 各下位尺度間の関連

各下位尺度間の相関係数をTable 3に示した。本研究においては, 被養育経験の尺度内相関は, 応答性と統制に有意な正の相関($r=.48$)があった。さらに, 自身の養育態度の尺度内相関にも, 応答性と統制に有意な正の相関($r=.41$)があった。中道(2013)の研究では, 統制因子は“親が子どもに強制する行動”としている。しかし, 浅野(2016)は, 子どもの養育には, 応答性だけでなく統制的な養育態度も重要であることを明らかにしている。この結果から, 応答性因子も統制因子も, 躰においてどちらも必要な養育行動であることが示された。

各下位尺度間相関において, 被養育経験の応答性と育児前の親の養育受容が有意な正の相関($r=.53$)を示し, 被養育経験の応答性と育児後の親の養育受容が有意な正の相関($r=.63$)を示した。この結果から, 被養育経験の応答性が高い人は, 親の養育受容も高いことが示された。

各下位尺度間相関において, 被養育経験の応答性と自身の養育態度の応答性が有意な正の相関($r=.28$), 被養育経験の応答性と自身の養育態度の統制が有意な正の相関($r=.23$), 被養育経験の統制と自身の養育態度の応答性が有意な正の相関($r=.21$), 被養育経験の統制と自身の養育態度の統制が有意な正の相関($r=.33$), を示した。この結果から, 被養育経験の応答性得点, 統制得点が高い人は, 自身の養育態度も高いことが示された。現在育児を行っている親は, 被養育経験を自身の養育の参考にしていると考えられる。

各下位尺度間相関において, 育児前の親の養育受容と自身の養育態度の応答性($r=.11$), 育児前の親の養育受容と自身の養育態度の統制($r=.12$), 育児後の親の養育受容と自身の養育態度の応答性($r=.15$)は, 相関はみられなかった。親の養育受容と自身の養育態度とは関連がみられないことが示された。

各下位尺度間相関において, 道具的・情緒的サポートと育児後の親の養育受容が正の有意な相関($r=.25$)を示した。この結果から, 道具的・情緒的サポートが高い人は, 育児後の親の養育受容も高いことが示された。さらに, 道具的・情緒的サポートと被養育経験の応答性が有意な正の相関($r=.27$)を示した。この結果から, 被養育経験の応答性が高い人は, 道具的・情緒的サポートも高いことが示された。

Table2 各下位尺度の記述統計

		項目数	M	SD	α 係数
親の養育受容	育児前の親の養育受容	4項目	2.92	.63	.66
	育児後の親の養育受容	4項目	3.36	.59	.82
被養育経験	被養育経験の応答性	8項目	2.9	.61	.87
	被養育経験の統制	4項目	3.24	.51	.63
自身の養育態度	養育態度の応答性	8項目	3.34	.38	.76
	養育態度の統制	4項目	3.63	.38	.60
ソーシャルサポート	道具的・情緒的サポート	4項目	2.79	.53	.53
	情報サポート	4項目	1.87	.54	.73

Table3 各下位尺度得点間の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8
1 育児前の親の養育受容	-	.63***	.53***	.30***	.11**	.12**	.17***	-.07
2 育児後の親の養育受容		-	.63***	.38***	.15***	.21***	.25***	.04
3 被養育経験の応答性			-	.48***	.28***	.23***	.27***	.10*
4 被養育経験の統制				-	.21***	.33***	.12**	.01
5 自身の養育態度の応答性					-	.41***	.18***	.12**
6 自身の養育態度の統制						-	.05	.02
7 道具情緒的サポート							-	.17***
8 情報サポート								-

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$,

3. 各下位尺度が自身の養育態度に与える影響

各下位尺度が自身の養育態度に与える影響を検討するため、各下位尺度を独立変数、自身の養育態度を従属変数として一括投入式重回帰分析を行った(Table 4)。

被養育経験の応答性と自身の養育態度は関連がみられた($\beta=.21$)。さらに、被養育経験の統制と自身の養育態度も関連がみられた($\beta=.20$)。この結果から、自身の養育態度に影響を与えるものは、被養育経験であることが明らかになった。現在育児を行っている親は、被養育経験を自身の養育の参考にしており、その意味で、養育態度はある程度世代間伝達されていると考えられる。

4. 親の養育受容スタイルによる分類

親の養育受容尺度の育児前の親の養育受容得点と、育児後の親の養育受容得点をそれぞれ中心化して、Ward法によるクラスター分析を行い、3つのクラスターを得た。第1クラスターには194名、第2クラスターには246名、第3クラスターには154名の調査対象が含まれていた。育児前と育児後で、養育者から受けた被養育経験の捉え方がどのように変化するかを検討するために、3つの親の養育受容スタイルごとの育児前の親の養育受容と、育児後の親の養育受容の得点に対して1要因の分散分析を行った結果をTable 5に示した。

主効果が有意であったことから、TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、育児前の親の養育受容、および育児後の親の養育受容について、第2クラスター>第1クラスター>第3クラスターという有意な得点差を示していた。各クラスターの育児前の養育受容と育児後の養育受容の得点に有意な変化量があるかを対応のあるt検定によって検討した。第1クラスターは育児前と育児後の間には、有意な差がみられた($t(193) = 12.8, p < .05$)。第2クラスターは育児前と育児後の間には、有意な差がみられた($t(245) = 12.2, p < .05$)。第3クラスターは育児前と育児後の間には、有意な差がみられた($t(154) = 12.1, p < .001$)。全てのクラスターにおいて、育児前より育児後の養育受容は高い傾向が示された。(Figure 2)。

第1クラスターは、育児前の親の養育受容が全体の平均値と同程度であり「受容平均群」とした。第2クラスターは、育児前の親の養育受容、育児後の親の養育受容が共に高い傾向を示した。このクラスターに属する者は、育児を経験する前から親の養育受容が高い傾向にあると考えられるため、「高受容維持群」とした。第3クラスターは、育児前の親の養育受容が低い傾向を示したため「受容低群」とした。

Table4 自身の養育態度と他の説明変数との重回帰分析 N=594

説明変数		標準偏回帰係数(β)
		基準変数：自身の養育態度
親の養育受容	育児前親の養育受容	-.05ns
	育児後親の養育受容	.02ns
被養育経験	被養育経験の応答性	.21***
	被養育経験の統制	.20***
ソーシャルサポート	道具的・情緒的サポート	.07ns
	情報サポート	.07ns
R^2		.15***

*** $p < .001$

Table5 各クラスターの平均(SD) 及び 分散分析と多重比較の結果

	C L 1	C L 2	C L 3	F 値	η^2 partial	多重比較の結果	
	(n=194)	(n=246)	(n=154)				(2,591)
親の養育受容	育児前	2.82 (.29)	3.49 (.29)	2.12 (.35)	960.38***	0.77	CL2>CL1>CL3
	育児後	3.38 (.40)	3.77 (.25)	2.69 (.57)			

*** $p < .001$

5. 親の認知受容スタイル別の各尺度との関係

得られた3つの群によって、各下位尺度がどう影響するかを検討するために、1要因の分散分析を行った結果をTable 6に示した。被養育経験の応答性と統制は、「高受容維持群」が高く、「受容低群」が低かった。自身の養育態度の応答性と統制は、「高受容維持群」が高く、「受容低群」が低かった。ソーシャル・サポートにおいては、道具的・情緒的サポートは「高受容維持群」が高く、「受容低群」が低かった。情報サポートは有意な差はみられなかった。

これらの結果から、親の養育受容スタイルで分けた「高受容維持群」は、被養育経験と自身の養育態度の得点が高く、育児サポート得点も高いことが明らかになった。それに対し、「受容低群」は、被養育経験と自身の養育態度の得点が低く、育児サポート得点も低いことが明らかになった。情報サポートと親の養育受容とは関連がないことが明らかになった。

研究Ⅱ

【目的】

研究Ⅰの質問紙調査において、育児前の養育受容と育児後の養育受容得点に有意な差があり、育児後の得点は高くなる傾向がみられた。ほとんどの親の変化量はそれ程大きくなかったが、一部の親に変化量の大きい親がみられた。そこで、親の養育受容の変化量が大きい親は、どのような経緯で被養育経験の捉え方に変化が生じたのか、半構造化面接を通して検討する。

【方法】

1. 調査対象と方法

調査対象：質問紙調査で「面接調査へのご協力をお願い」に対して「協力してもよい」に○を記した89名の父親・母親のうち、育児前と後の親の養育受容の変化量が0.5以上の者で、かつ最終的に面接を了承してくれた7名。

調査手続き：面接はオンラインにて半構造化面接を実施した。協力者の同意を得て、ボイスメモに録音をした。

調査時期：2020年12月上旬

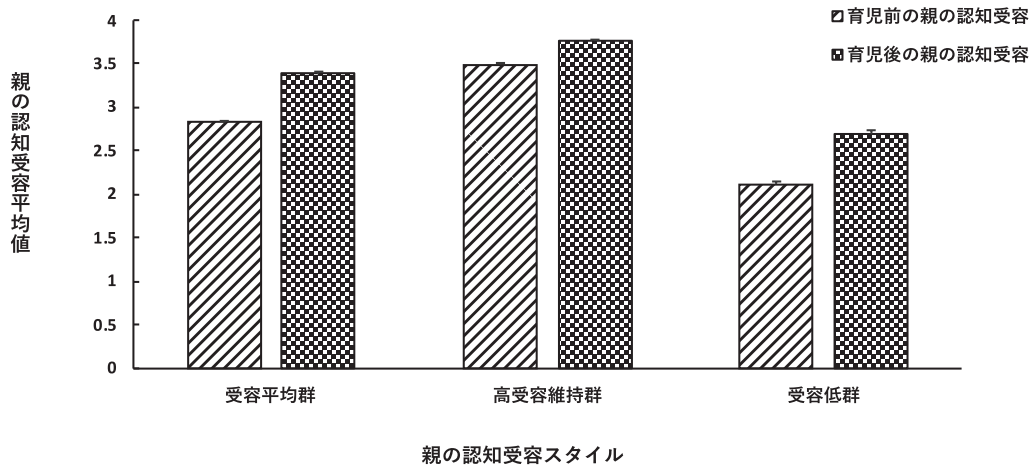


Figure2 各クラスターにおける育児前と育児後の親の養育受容得点

Table6 親の養育受容スタイルと各尺度との関係 平均(S D) 及び 分散分析と多重比較の結果

		受容平均群 (n=194)	高受容維持群 (n=246)	受容低群 (n=154)	F 値	η^2 partial	多重比較の結果
被養育経験	応答性	2.92 (.44)	3.23 (.49)	2.35 (.57)	149.65***	0.34	高受容維持群>受容平均群>受容低群
	統制	3.26 (.44)	3.39 (.47)	2.96 (.54)	37.46***	0.11	高受容維持群>受容平均群>受容低群
自身の養育態度	応答性	3.28 (.36)	3.42 (.35)	3.29 (.42)	9.39***	0.03	高受容維持群>受容平均群, 高受容維持群>受容低群
	統制	3.63 (.37)	3.69 (.33)	3.53 (.43)	8.56***	0.03	高受容維持群>受容低群, 受容平均群>受容低群
ソーシャルサポート	道具的・情緒的サポート	2.80 (.51)	2.89 (.50)	2.65 (.56)	6.86*	0.04	高受容維持群>受容低群
	情報サポート	1.87 (.50)	1.85 (.54)	1.90 (.60)	0.38 _{ns}	0.00	有意な差は見られない

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

倫理的配慮:調査にあたり、文書で、参加者に調査の目的、回答の任意性、個人情報の特非特定、調査目的のみにデータを用いることを説明した。面接協力者には、「面接調査実施の同意文書」にサインしてもらった。なお、本研究は、聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理審査委員会の審査を受け認められた(承認番号R02U007)。

2. 調査内容:質問項目の概要は以下の6項目。

- (1)あなたにとって親はどんな存在でしたか。
- (2)あなたは親とどのような関係性でしたか。
- (3)育児をする際、自身の親からの育児行動を参考にすることはありますか。それはどのような育児行動ですか。
- (4)あなたは育児を経験することで自分の考え方や価値観が変わったと思う事がありますか。
- (5)あなたは育児サポートをしてくれる人の存在を有難いと思いますか。それはどのようなことですか。
- (6)育児を経験したい今、あなたの親との関係が変化する出来事がありましたか。それはどのようなことでしたか。

【結果と考察】

1. 面接協力者の概要

面接協力者の概要をTable 7に示した。研究Iの質問紙調査における育児前の親の養育受容得点と、育児後の親の養育受容得点の違いを算出し、「受容平均群」「高受容維持群」「受容低群」のどの群に属するかを調べた。面接協力者7名のうち2名が受容低群、5名が受容平均群であった。「高受容維持群」は含まれていなかった。

2. 語りについての考察

面接協力者に、自身の親からの育児行動を参考することがあるか質問した。その結果、7名中4名(4名とも「受容平均群」)が親の育児行動の真似をすると答えていた。それに対して、7名中3名(内1名が「受容平均群」、2名が「受容低群」)が反面教師にして育児行動は真似ないように意識すると答えていた。3名は、自身が親から受けた育児行動に疑問を感じており、自身の子どもには、その育児行動を行わないように心掛けていた。

自身の親からの育児行動を参考にすることに関して7名

に共通していたことは、親からの被養育経験を自分の中で精査し、良い育児行動は積極的に取り入れ、子どもに伝えていく。逆に好ましくないと感じる育児行動は、自身の子どもに伝えないように意識していることが明らかになった。この結果から、面接協力者の7名は、否定的な被養育経験を肯定的に捉えなおしていると考えられる。

面接協力者に育児を経験したことで考え方や価値観が変わったか質問した。その結果、女性は子どもへの愛情、親としての責任など情緒面を語っていた。一方、男性は育児を経験したことが仕事に反映されていると語っていた。面接協力者の7名は、育児を経験したことで親の視点に立つことができ、育児を経験する前と後では価値観が変わったと答えていた。この結果から、面接協力者の7名は、被養育経験を客観的に捉えており、内省していると考えられる。

面接協力者に育児サポートについて質問した結果、全員に、親以外にも、友人や兄弟、夫の両親など、育児をサポートしてくれる人が存在した。面接協力者に共通していたのは、現在、育児をサポートしてくれる人が身近にいて、困った時に頼れる人が存在するということであった。この結果から、不安な気持ちを解消するには、育児サポートが重要であると考えられる。

面接協力者に育児を経験することで親との関係性に変化があったか質問した。その結果、7名に共通していたのは、自身が育児を経験することによって、親がどのような気持ちで自分を育てていたのか理解でき、親の視点が獲得できたことであった。4名は、親の視点が獲得できたことで、親との距離が縮まったと語っていた。しかし、3名は、親の視点は獲得できたが、親との関係性が近くなったとは思わないと語っていた。現在の親との距離感は、親の養育受容とはあまり関係なく、大切なのは、被養育経験を内省することができたかではないだろうか。面接協力者の7名は、それぞれ違った問題や葛藤を抱えながら、自身の親から受けた被養育経験を客観的に捉え、自身の養育態度を少しでも良くしようと努力していた。この結果から、被養育経験を内省したことで、親の視点を獲得し、自身の養育態度に良い影響を与えたと考えられる。

Table7 面接協力者の概要

	A	B	C	D	E	F	G
性別	女性	男性	女性	女性	女性	男性	女性
年代	30代	30代	30代	40代	30代	40代	30代
子ども人数	2人	2人	2人	2人	2人	2人	1人
主な養育者	母親・祖母	父親・母親	父親・母親	母親・曾祖母	父親・母親	父親・母親	母親・祖母
育児前親の養育受容	2.25	2.5	1.5	2	2.5	2.25	2.5
育児後親の養育受容	3.25	4	3.5	2.5	3	3.5	3.75
親の養育受容スタイル	受容平均群	受容平均群	受容低群	受容低群	受容平均群	受容平均群	受容平均群

総合考察

ここでは、研究ⅠとⅡを総合的に考察する。

1. 仮説の検証

本研究は、育児前と育児後で、被養育経験の捉え方がどのように変化するか、自身の養育態度にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とし、未就学児の育児を行っている父親・母親594名を対象に検討した。

本研究の仮説「自身の養育態度が変化するパターンには、Figure 1のA(親の養育受容が肯定的なまま伝達)、B(親の養育受容が肯定的から否定的に変化)、C(親の養育受容が否定的から肯定的に変化)、D(親の養育受容が否定的なまま伝達)の4つのタイプがある」に対する結果の概略を示し、検討を行う。

研究Ⅰの結果から、親の養育受容スタイルで分けた「高受容維持群」は、被養育経験得点と自身の養育態度得点が高く、育児サポートも高いことが明らかになった。「高受容維持群」は、被養育経験が応答的で、親を安定したものとして内在化し、親の養育受容が肯定的なまま伝達する仮説のAタイプに分類されると考えられる。

親の養育受容スタイルで分けた「受容低群」は、被養育経験得点と自身の養育態度得点が低く、育児サポートも低いことが明らかになった。一方、育児後の養育受容得点は、他の群より有意に低いものの、得点は育児前養育得点より有意に高くなった。これらの結果から、「受容低群」は、仮説のDタイプに分類されると考えていたが、そうではなかった。したがって「受容低群」は、被養育経験が非応答的で、親を不安定なものとして内在化し、親の養育受容が否定的なまま伝達する仮説のDタイプは群としては見いだせなかったといえる。

親の養育受容スタイルで分けた「受容平均群」は、育児前の親の養育受容得点が2点台から、育児後の親の養育受容得点が3点台に変化していることが明らかになった。これは、親の養育受容が否定的から肯定的に変化する仮説のCタイプに分類されると考えられる。さらに、研究Ⅱの結果から、親の養育受容の変化量が大きかった7名は、親からの被養育経験を自分の中で精査し、好ましくない育児行動は自身の子どもに伝えないように意識していることが明らかになった。これは、仮説のCタイプに分類されると考えられる。これらの結果から、「受容低群」と「受容平均群」の中にCタイプが存在すると考えられる。

親の養育受容スタイルで分けた3つの群すべてにおいて、養育受容得点は、育児前より育児後が高かった。この結果から、親の養育受容が肯定的から否定的に変化する仮説のBタイプは確認されなかった。

従って、仮説BとDは支持されなかったものの、仮説AとCに対しては支持された。

研究Ⅰの相関(Table 3)と重回帰分析(Table 4)の結果から、親の認知受容や育児サポートは、自身の養育態度との関連はあまりみられなかった。よって、Figure 1の研究の仮説のパスは、自身の養育態度まで到達しないことが明らかになった。

2. 結論

以下の3点について理論的な位置づけを行う。

本研究の第1の結論は、自身の養育態度に親の認知受容や育児サポートはあまり影響を与えないという点である。研究Ⅰの相関(Table 3)と重回帰分析(Table 4)の結果から、影響を与えるものは被養育経験であることが明らかになったが、重回帰の値としてはあまり大きな影響ではないと考えられる。現在育児を行っている親は、被養育経験を自身の養育の参考にしており、養育態度は世代間伝達するという結果は、遠藤(1992)の「抱っこなどの無意識の身体的記憶が子が母となった時の養育の基礎とし、世代間伝達をする」との理論に整合している。しかし、世代間伝達はそれほど大きな要因ではなく、自身の養育態度に影響をあたえるものは、子どもの気質や兄弟の有無など、様々な要因が複雑に絡み合っていると考えられる。

第2の結論は、育児サポートが重要という点である。研究Ⅰの結果だけでは、育児サポートは養育態度にあまり影響を与えていないことが明らかになった。しかし、研究Ⅱにおいて、親の養育受容の変化量が大きかった7名は、育児をサポートしてくれる人が身近にいて、困った時に頼れる人が存在したことによって、自身の養育態度に良い影響を与えたことが明らかになった。この結果は、木本・岡本(2007)の「ネガティブな養育の世代間伝達を起こしていない母親は、夫などからの育児サポートを多く受けていることや、親の代わりになる重要な他者の存在がある」との理論と整合していた。育児サポートの重要性が明らかになったことから、今後、誰もが気軽に利用できる育児サポートシステムの検討を重ねていく必要があると考えられる。

第3の結論は、親の養育受容の変化量が大きかった7名が、親から受けた被養育経験を内省した点である。面接協力者の7名は、育児を経験したことで、親の視点の獲得、価値観の変化などの体験をとおして、被養育経験を内省でき、自身の養育態度に良い影響を与えたと考えられる。このことから、面接協力者の7名は、被養育経験を客観的に捉える力があると考えられる。

この結果は、渡辺(2016)の「再アタッチメント療法によって、母親の内省的自己を育みなおすことで母子関係を改善

する」や、林・横山(2010)の「ネガティブな養育の世代間伝達を起こしていない母親は、自身の経験や育児に対して内省する機会が多く、されて嫌だったこと、したくないことを明確に意識している」との理論と整合していた。親の養育受容が低いケースでは、親教育プログラム等で、母親の内省的自己を育みなおすことが有効であると考えられる。

以上のような結果から、親の養育を否定的に捉えているケースにおいても、被養育経験を内省することができれば、親の養育を受容することができ、また、育児サポートがあれば自身の養育態度に否定的な影響を及ぼさないことも明らかになった。育児を経験することで、親の養育受容が変化することから、今後は、親教育プログラム等で、母親の内省的自己を育みなおすことや、誰もが気軽に利用できる育児サポートシステムの検討を重ねていく必要があると考えられる。

3. 問題点と今後の課題

研究結果より、自身の養育態度に影響をあたえるものは、様々な要因が複雑に絡み合っていると考えられる。兄弟がいてすでに子育て経験がある場合と、第一子とでは親としての経験値が違うため、自身の養育態度にも変化が生じると考えられる。子どもの気質や、親自身の育児経験の量や質が、自身の養育態度にどのような影響を与えるか、これらの要因を明らかにするために、今後さらにこの点を検討する必要がある。

今回の結果では、Bタイプ(親の養育受容が肯定的から否定的に変化)やDタイプ(親の養育受容が否定的なまま伝達)のケースはみられなかった。しかし、現実には育児の孤立化に悩んでいる親は存在すると考えられる。育児の孤立化に悩んでいる親は、このような調査には参加しないのではないだろうか。これはこの研究に関する調査の限界である。今後は、育児の孤立化に悩む親が、もっと気軽に利用できる育児サポートシステムが必要であると考えられる。育児サポート体制の見直しや、親教育プログラムの導入など、社会全体が育児に協力的になることが期待される。

謝辞

本論文は、2020年度に聖徳大学大学院児童学研究科に提出した修士論文の一部を加筆、修正したものである。調査の実施にあたり、快く調査実施にご協力くださいました、各幼稚園の園長先生はじめ職員の皆様には、心より感謝いたします。そして、お忙しい中、アンケートに回答していただきました多くの皆様、また、面接にご協力いただきました7名の皆様、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 浅野 良輔・吉澤 寛之・吉田 琢哉・原田 知佳・玉井 颯一・吉田 俊和(2016). 養育者の養育態度が青年の養育認知を介して社会化に与える影響 心理学研究, 87, 3, 284-293.
- 遠藤 利彦(1992). 内的作業モデルと愛着の世代間伝達 東京大学教育学部紀要, 32, 203-220.
- Fonagy, P. (2019). Attachment Theory and Psychoanalysis. 遠藤 利彦・北山 修(監訳) 愛着理論と精神分析 誠信書房.
- 林 裕美・横山 恭子(2010). ネガティブな養育経験を持ちながら適切な情緒応答性を示す母親の特性について - 負の世代間伝達を断ち切るために - 上智大学心理学年報, 34, 33-42.
- 数井 みゆき(2018). 親世代におけるアタッチメント 数井 みゆき・遠藤 利彦(編) アタッチメント生涯にわたる絆(pp.174-208) ミネルヴァ書房.
- 木本 実際・岡本 祐子(2007). 母親の被養育経験が子どもへの養育態度に及ぼす影響 広島大学心理学研究 7, 207-225.
- 中道 圭人(2013). 父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇), 63, 3, 109-121.
- Rholes, W.S., Simpson, J.A., Blakely, B.S., Lanigan, L., & Allen, E.A. (1997). Adult attachment styles, the desire to have children, and working models of parenthood. *Journal of Personality*, 65, 357-385.
- 氏家 達夫 (2013). 親子関係と生涯発達 氏家 達夫・高濱 裕子(編) 親子関係の生涯発達心理学(pp.1-45) 風間書房.
- van IJzendoorn, M.H., & Bakermans-Kranenburg, M.J. (1997). Intergenerational transmission of attachment: A move to the contextual level. In L. Atkinson & K.J. Zucker (Eds.), *Attachment and psychopathology*. New York : Guilford, 135-170.
- 渡部 久子(2016). 「母子臨床と世代間伝達」 金剛出版.